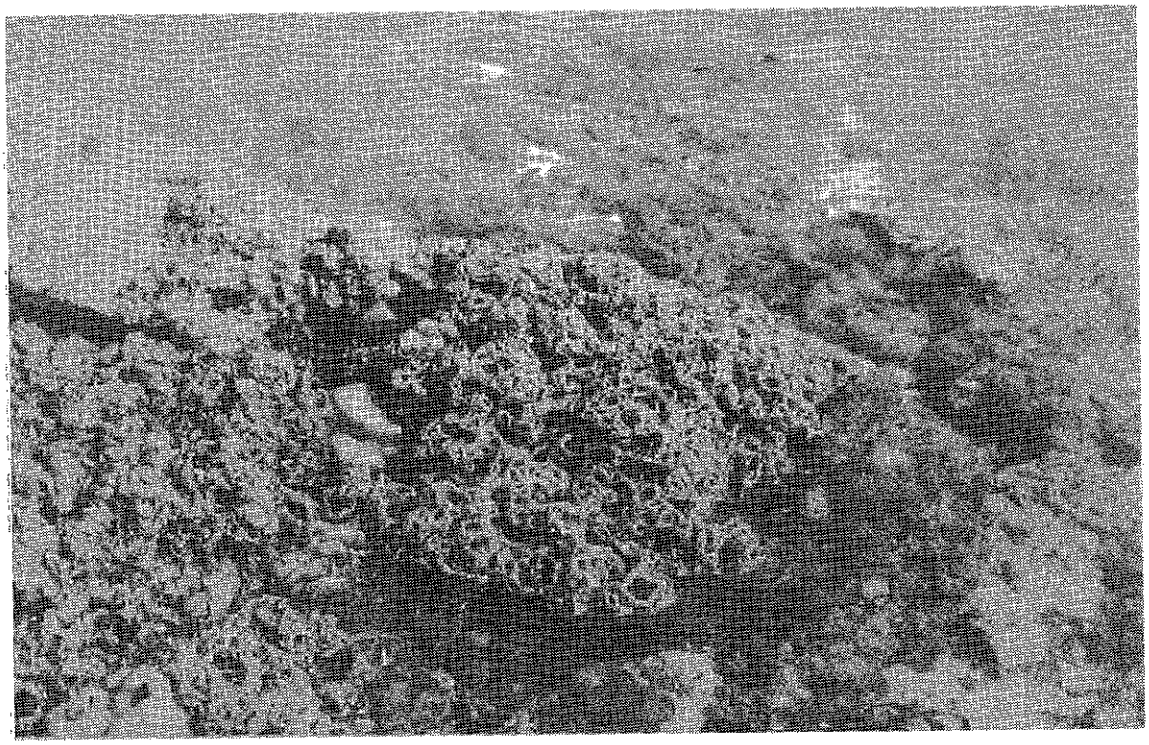
ISSN 1341-6928

串本海中公園 マリンパビリオン

2000. 4 Vol. 29, No. 4



カゴメノリ

Hydroclathrus clathratus (C.Agardh) Howe

体が中空で袋状であることなど先月号で紹介したフクロノリによく似ているが、体表面に多数の丸い穴が開き網目状となることで区別できる。生育時期はフクロノリと同じ1月～3月頃で、生育する場所も潮間帯付近の岩礁・転石の上と、ほぼ同じであるため、しばしば混在して生育する。大きさは直径 10 cm前後で、普通多数が集まって大きな群落を作る。体はごわごわしており日本では普通食用にしないが、東南アジアでは食用とする地域があると聞く。写真は干潮時に錆浦地先の潮間帯で干出したものを撮影した。褐藻綱カヤモノリ目カヤモノリ科。 S. U.

串本海中公園センター

スナギンチャク類の飼育

森 美枝

スナギンチャク類は、イシサンゴ類と同じ刺胞動物の仲間ですが、イシサンゴ類が骨によって体を支えているのに対し、スナギンチャク類は体の中に砂粒などを大量に埋め込んで体を支えているという、ちょっと風変わりな生態をもった動物です。串本周辺では、スナギンチャク類は水深1m前後の浅い場所で見られるものから、水深20～30mのやや深い場所で見られるものまでいくつか種類がありますが、比較的入手しやすいことから当館では1979年より20年以上飼育展示されてきました。私が、スナギンチャク類を含む刺胞動物の飼育に携わって8年近くがたちますが、スナギンチャク類の飼育についてはどちらかといえば、長期飼育が難しいという印象がありました。

しかし、最近になって飼育中のスナギンチャク類が卵を持っていたり、放精を行ったりするようになり、飼育期間も2年以上飼育できる種類も出てきたので、今回その飼育方法の現状について少しまとめてみたいと思います。

これまで当館で飼育されてきたスナギンチャク類は、センナリスナギンチャク、チビセンナリスナギンチャク、カイメンセンナリスナギンチャク、センナリスナギンチャクの一種、ヤツマタスナギンチャク、イワスナギンチャクの一種、マメスナギンチャクの一種の7種です。これらはいずれも当館周辺の海で自家採集したり、近くのエビ網にかかったものをもらってきたりしたものです。

スナギンチャク類の飼育については、以前本誌(Vol. 15, p. 70)で紹介されていますが、飼育水槽の大きさは75×75×90(H)cmで、濾過槽はなく、自然海水を常時注入し、オーバーフローから排水する開放式をとっています。水温は冬場はヒーターによって約20℃に保たれていますが、夏場は29℃近くにまで達します。水槽内のレイアウトは、底面にサンゴ礫を厚さ約3cmに敷き詰め、水槽中央に水槽の高さ半分位まで石を積み上げてスナギンチャクを配置するための岩組を造っています。

スナギンチャク類を飼育するにあたって大切な条件の一つに、照明があげられます。スナギンチャク類のうちマメスナギンチャクとイワスナギンチャクは造礁性サンゴと同じように体内に共生藻を持ち、その藻類が光合成をすることによって養分をもらって生きています。そのため、充分な光さえあれば、長期飼育が可能ですが、その光を得るために、試行錯誤を繰り返してきたことは、これまで本誌で幾度も紹介されてきたとおりです。

そこで、5年前よりサンゴやイソギンチャクの飼育で効果を上げているナショナル製のスカイビームランプ150w1台を設置したところ、スナギンチャク類にも効果があることがわかりました。以前には状態良く飼育することが難しかったマメスナギンチャクも、現在では水槽内でポリプの数をどんどん増やして成長しています。ちなみに、この水槽の水面付近で光量を測定したところ、5万ルクスという値が出ました。

しかし、光量が多ければ多いほどいいのかというと、そう簡単にいかないのがこの水槽の難しいところです。なぜならば、この水槽には、共生藻をもたない、光を必要としない種も一緒に入っていて、光を強くすると今度はこれらのスナギンチャク類の状態が悪くなり、ポリプを開かなくなるといった問題が出てくるからです。本来、光を必要としないタイプのスナギンチャク類は、水深の深いところや岩の陰になったりするところで生活しているため、光の強く当たる場所では調子をくずしてしまうのかもしれません。

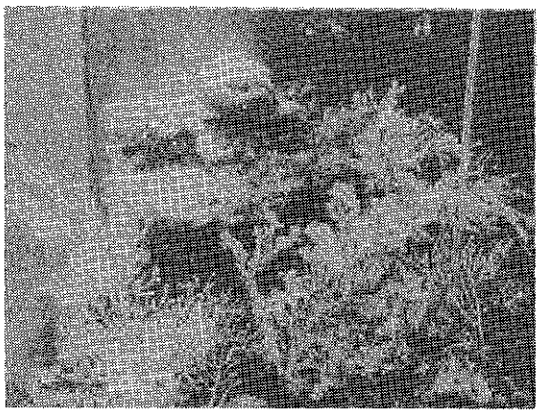
そこで、これらのスナギンチャクのために園芸用の遮光ネットを使って日除けを作ってみました。この、遮光ネットはホームセンターなどで簡単に手に入り、遮光率が50%、80%などといろいろあって選ぶことができます。今回は遮光率50%のものを使いました。こうして、光を嫌うスナギンチャク類の上面を覆うようにして陰を作ってみましたが、完全に光を遮るわけで

はないので、水槽内が暗くならず、展示面でも違和感がないと思われます。

しかし、これらのスナギンチャク類を飼育するためには、さらに大切なことがあります。共生藻を持たないスナギンチャク類は、当然生きていくための栄養分を自分で確保しなければなりません。つまり、エサを食べなければ死んでしまいます。いかにうまくエサを与えられるかが、長期飼育を行う上でとても大事な問題となってきます。

スナギンチャク類はイソギンチャクを小さくしたようなポリプで海中を漂う有機物やプランクトンを捕まえて食べています。ですから、水槽内でもポリプが食べやすいように細かなエサを与えなければなりません。当館ではこれまで、エサとして冷凍アミや人工プランクトンなどを海水とともにミキサーにかけて作ったジュースを、1日3回水中に直接流し込むようにして与えてきました。しかし、この方法では残餌が大量に出るうえに、その残餌が沈殿して水質が悪化しやすい、という問題が生じます。

そこで、4年前から元々ウミシダ類の給餌方法としてあみだされたアイスキューブ法（Vol. 21, P. 50-51）をスナギンチャク類の給餌にも応用しています。次号につづく



飼育中のスナギンチャク類

水族館トピックス -56-
イトヒキフエダイを展示

御前　洋

沖縄や石垣島の市場で時々見かけるイトヒキフエダイ*Symphorus nematophorus* (Bleeker) 1個体が、このほど当地で捕獲され、当館で展示を始めたので紹介する。

今回捕獲された個体は、去る4月3日、串本町袋港沖合に設置された小型定置網に入網した、体長475mmのものである。

捕獲した漁師さんは、網を絞り始めた時に雑魚に混じって赤色系の魚がいると気付き、「久振りに良い型のタイが入っているワイ！」と思ったそうだ。ところがとりあげた魚はタイではなかった。「体色は赤色と淡桃色のマダラ模様に細い青色の縦線が頭部から尾部にかけて沢山あるし、背鰭の後方上端が糸状に伸びている。この魚は今までに見たことがない魚だ！」と思い、当園に連絡したそうだ。電話の内容からフエダイの仲間（センネンダイ？まさか？）らしいことは想像できたが、港に出かけて魚を見て驚いた。以前八重山海中公園研究所のある黒島のリーフ外縁部を潜水中に一度見たことのある魚で、その色調と体型から受ける印象は強く私の脳裏に焼き付いている。魚の状態は糸状に伸びた背鰭の先端と上唇に若干の網ズレがあるのみで状態は非常に良好であったので、当館に持ち帰った。

日本産魚類検索（中坊編、1993）で調べたところ、本種は琉球列島以南に分布するとあるが、平田ほか（1996）によると高知県の柏島で2個体、また池田博美氏の情報によると、和歌山県南部町沖で10年ほど前に体長約1mのもの1個体、更に近年体長40cm前後のもの2個体が捕獲されているという。

この珍しい魚、薬浴後大水槽にて展示を始めたところ、当初は当地で捕獲され今年で飼育10年目になる体長約80cmのメガネモチノウオに威嚇されてやや落ち着かなかったが、7日後にはキビナゴやオキアミなどの餌を食べ始めた。

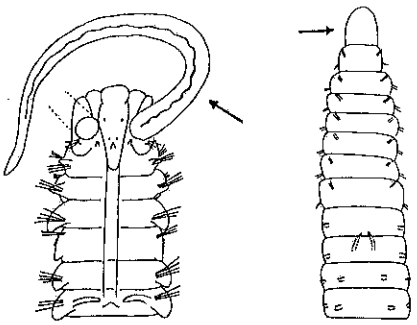
地味な魚が多い展示魚の中、赤色の地に青色の縦線を持つ本種は、時折体色を鮮紅色と淡桃色のマダラ模様に変化させて観客の目を引いている。

POLYCHAETOLOGICA (10)
多毛類の科の検索 8

内田 紘臣

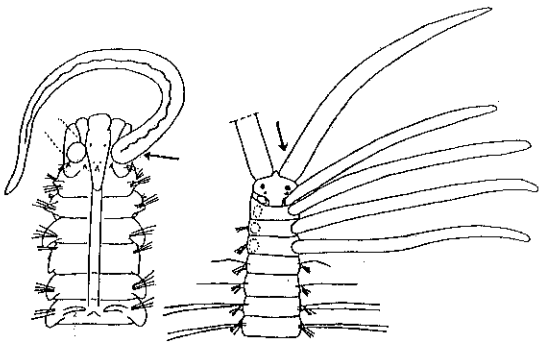
前回(Vol. 28, p. 71)に続き、多毛類の科の検索表をあげる。

77(76). 前口葉を含む頭部付近に1対の大きな副感触手様突起をもつ. 78
77. 大きな副感触手様突起を欠く. 85

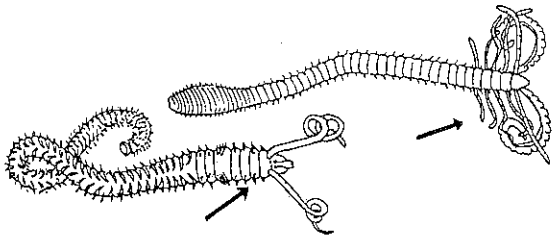


78(77). 副感触手様突起は前口葉側面かそれより後方から派出する. 79
78. 副感触手様突起は前口葉先端部付近より派出する.

クマノアシツキ科 Acrocirridae



79(78). 少なくとも体前部のいくつかの体節両側に長い糸状の鰓糸をもつ. 80
79. 上記のような鰓糸を欠く. 81

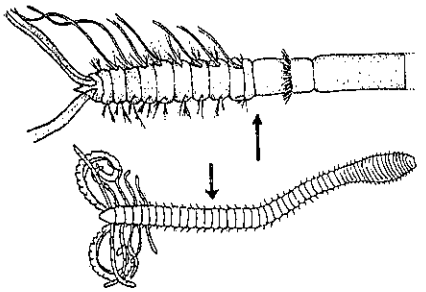


80(79, 89). 体節は短い（9節）体前部（胸部）と、長い体後部（腹部）とに明瞭に区別できる.

Fam. Heterospionidae

80. 体節は前・後部を明瞭に区別し得ない.

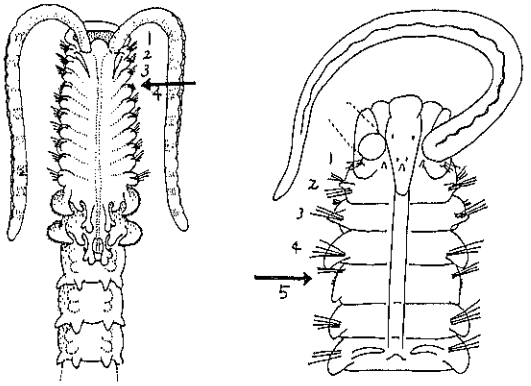
ミズキヒゴカイ科 (89)



81(79, 91, 104). 第4剛毛節は前後の剛毛節の剛毛と異なる著しく太い剛毛をもち、体後部に櫛状剛毛をもつ.

ツバサゴカイ科 Chaetopteridae

81. 第5剛毛節にのみ太い剛毛をもつことはあっても、第4剛毛節のみに太い剛毛をもつことはないか、もし第4剛毛節にのみ太い剛毛をもつ場合には体後部に櫛状剛毛を欠き、被嚢鉤状剛毛をもつ. 82



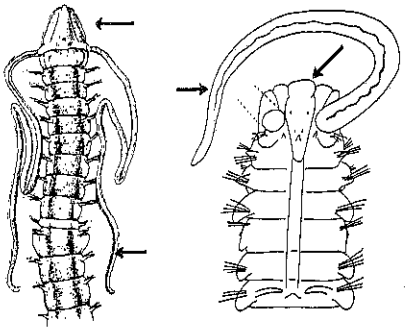


(91 の図も参照のこと)

82(81, 90). 前口葉は背腹に著しく扁平. 副触手鬚の縦走する溝付近には比較的大型の絨毛が密生する.

モロテゴカイ科　Magelonidae

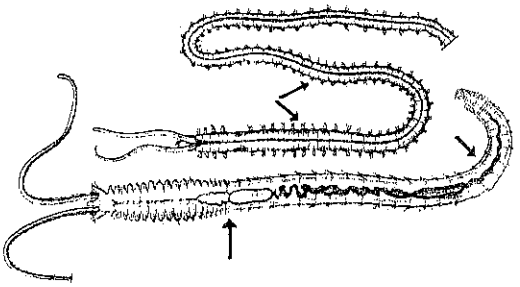
82. 前口葉は扁平ではない. 副触手鬚は非常に細かい繊毛をもつことはあっても、絨毛をもつことはない.　83



83(82, 92). 体は前・中・後部の３部に明瞭に分けられない.

スピオ科　Spionidae

83. 体は前・中・後部の３部に明瞭に分けられる.　84

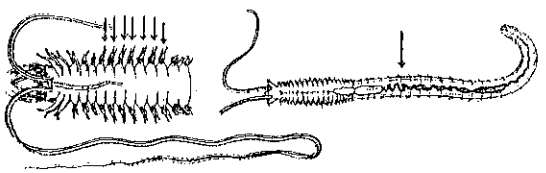


84(83, 92')体中部の疣足はフラスコ型の背腹両触鬚をもつか、少なくとも背触鬚はフラスコ型で、背腹両剛毛をもつ２叉型.

Fam. Poecilochaetidae

84. フラスコ型の背触鬚を欠く. 体中部の疣足は無叉型で、背剛毛を欠く.

Fam. Trochochaetidae



(92' の図も参照のこと)

85(77). 腹剛毛は複剛毛.

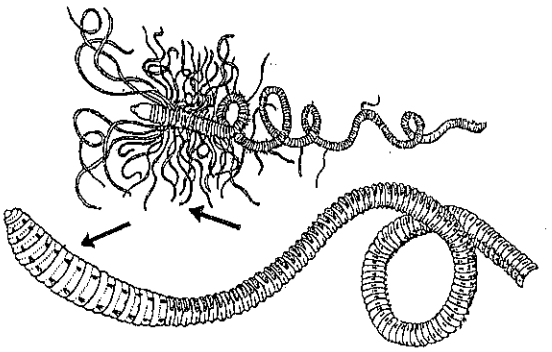
クマノアシツキ科(78)（感触手欠落個体）

85. 剛毛は全て単剛毛.　86



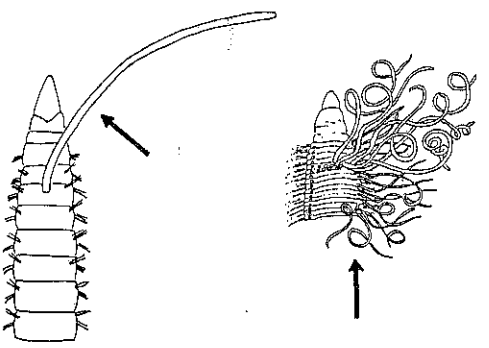
86(85). 長い糸状の鰓糸を体節、特に体前部体節にもつ.　87

86. 体節に長い糸状の鰓糸様のものを欠く.　90



87(86). 鰓糸は体前部体節の背面正中から１本（～２本）出る. 体節は前後を通して基本的に同型で、２つ以上の部分に分けられない.　88

87. 鰓糸は体節の左右両側から、各体節１対ずつ出るが、必ずしも全体節にはなく、特に体中～体後部ではこれを欠くか、ひどくとびとびにあることが多い. 体前部の1～2体節の背面左右に感触糸の束をもつものもある.　89

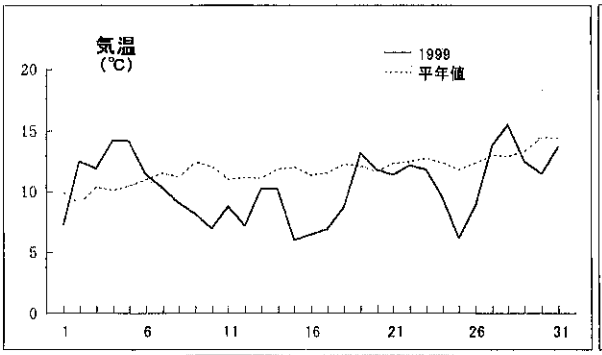


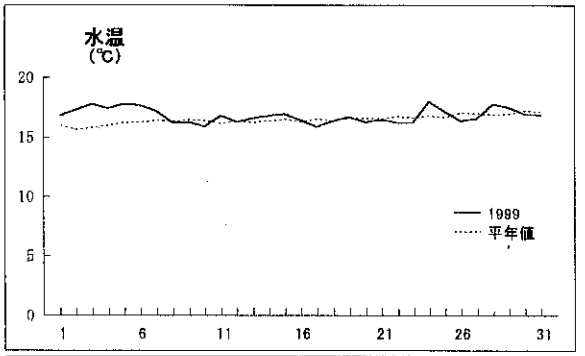
錆浦の海から

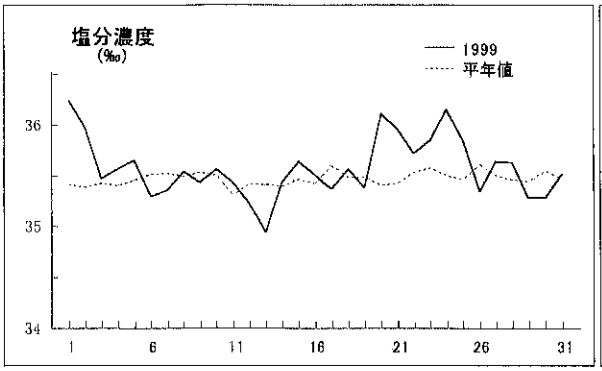
宇井 晋介

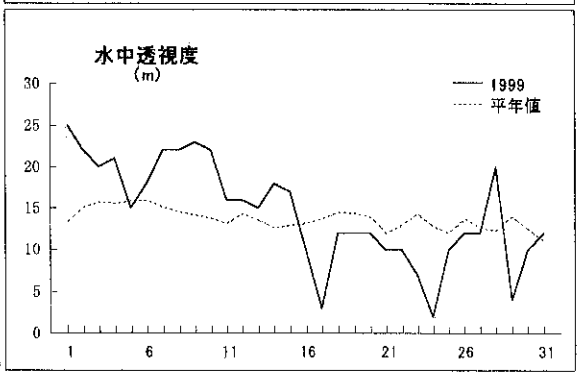
3月	気温　10.5 ℃	水温　16.9 ℃	塩分 35.6 ‰
平均値	透視度 14.7 m	月間降水量　113.3 mm	

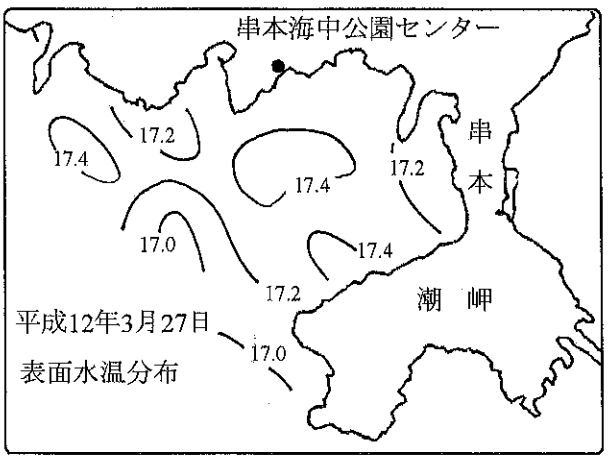
2月から3月の気温は平年以下となり、水温も極端な低下はなかったものの、春遅くまで低温傾向が続いている。ここ何年か当たり前になった熱帯系魚類の越冬も今年は少ないようだ。潜水しても目につくのはブダイやニシキベラの様な普通種ばかりでぱっとしない。春先から地先海岸で良く見られたのが、タカラガイ類の死殻。中でもハナビラダカラガイという種の殻が特に多い。ハナビラダカラガイは波打ち際近くの浅い海底にすむ小型種で、クリーム色の地に鮮やかなオレンジ色のリング状模様が可憐である。興味深いのは生きているのに殻の上に海藻が生えている個体がよく目につく事だ。同様の報告が過去錆浦（Vol. 6, No. 9）であるほか、県内でも幾つかの報告例があるが、原因については触れられていない。タカラガイ類の瀬戸物の様に美しい殻は、大きな外套膜を殻の上に広げて絶えず覆っているからこその産物なのだが、あるいは低水温で衰弱して長期間萎縮していたために、そうなってしまったものとも考えられる。











マリンパビリオン Vol.29, No.4 通巻340号
一部50円（年間購読料1,500円送料含む）
印刷日　平成12年4月20日
発行日　平成12年4月25日
郵便振替口座番号：00990-9-41351
口座名称：串本海中公園マリンパビリオン
編集兼発行人
〒649-3514和歌山県西牟婁郡串本町有田1157
（株）串本海中公園センター
電話　0735-62-4875
FAX　0735-62-7170
印刷所 坂本印刷
串本町串本2481　Tel：0735（62）0895